

万博公園探鳥会

2023年9月9日(土)

リーダー 田中宏・中筋好子・橋本昌宗・大矢麻由美
有賀憲介・平軍二(090-6901-1425)

1. 千里の鳥・万博の鳥「チョウゲンボウ」

(野鳥写真 橋本昌宗)



8月定例探鳥会は中止したが、リーダーによるモニタリングを8/26日実施した。連日暑い日が続いている中、季節を先取りし秋の渡り鳥のはしりと思われるチョウゲンボウの幼鳥2羽を、EXPOパビリオン周辺でゆっくり観察できた。

チョウゲンボウはハト大(雄33cm～雌39cm)の鳥。もともと山地の崖で繁殖していたが、最近は平野部の建物を岩場に見立てて繁殖するようになり、川べり周辺などで繁殖が拡大している鳥である。

万博公園探鳥会でのチョウゲンボウ観察は、冬鳥として数年に1回程度の稀な鳥であったが、ここ数年は複数回の観察が記録されるようになった。万博公園周辺の吹田市・豊中市でもチョウゲンボウ観察例が増えており、吹田市では安威川沿いでの観察例が多くなっていたが、冬 or 春秋の渡りの季節で、繁殖期ではなかった。

大阪府内で猛禽類の繁殖状況を調査・記録されている大阪希少鳥類研究グループの報告によると、チョウゲンボウ繁殖数は2006年に1番だったが、2013年に4番、2015年に12か所と増えていること、チョウゲンボウが増えている理由として、三つの特徴が上げられている(★1)。

第一は獲物の幅が広いことで、同属のハヤブサが鳥類中心であるのに対し、チョウゲンボウは昆虫・小型爬虫類・小型哺乳類・鳥類と、魚類以外は何でも食べることにある。第二は営巣場所、都会に住むようになり人工建造物に隙間や穴が無制限？にあること、第三には他の猛禽類にはない集団営巣(コロニー)を形成することができるので、番間に広いテリトリーを必要としないことである。

このように大阪近郊で増えているチョウゲンボウ、日本全体で見ると、もともとは東日本で留鳥、西日本で冬鳥であった(★3)。1970年代は山地の崖に営巣していたが、1990年代以降は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣するようになり、2010年代は近畿地方や中国地方にも営巣するようになったとのことで、大阪府の状況と一致している。

今回、EXPOパビリオンで観察した2羽のチョウゲンボウ、建物や樹木に止まっていると、複数羽のカラスに追いかけられ、ゆっくりできる状況でなかった。万博公園外で生まれて、万博公園にきたため、カラスの洗礼を受けていたと思われる。

★文献1 大阪希少鳥類研究グループ「希少鳥類生息調査報告報告 21」2016年度

★文献2 鳥類繁殖分布調査会「全国鳥類繁殖調査報告 2016-2021年」2021年10月

1-2. 図鑑で見るチョウゲンボウ繁殖地の変遷

①1957年初版:保育社:原色鳥類図鑑:小林桂助

夏季は主として山地に生息し、高山帯にも出現する。最近本州中部以北で集団営巣地が発見され、長野県十三崖は天然記念物に指定されている

②1982年初版:日本野鳥の会:フィールドガイド日本の野鳥:高野伸二

本州の川沿いや、海岸や山地の断崖で繁殖する。

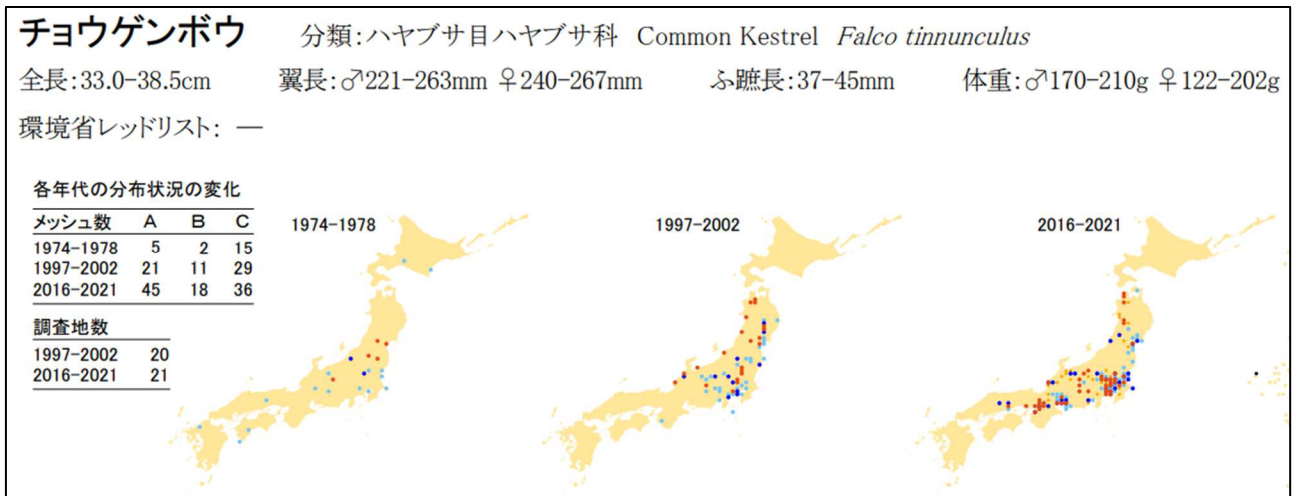
(集団営巣地として長野県・山梨県・栃木県など、数カ所知られている。)

③2000年初版:平凡社:日本の野鳥 590:真木広造・大西敏一

平地から山地の崖や林で営巣するが、近年人工構造物での営巣が増えている。

1-3. 全国鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021年・チョウゲンボウ

④1974年～では山地の崖に営巣していたが、1997年～は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣するようになった。2016年～は近畿地方や中国地方でも繁殖が確認された。



2. 8月26日モニタリング結果報告より

(野鳥写真 橋本昌宗)

トピックスは、2羽のチョウゲンボウ、EXPO'70 パビリオン周辺で、多数のカラスに追われながらも飛び回った。建物や付近の木に休んでもすぐ追われるものの、パビリオン周辺を行ったり来たり、時にはチョウゲンボウ特有のホバリングもしながら、飛び回った。小鳥類もメジロ(36羽)・エナガ(31羽)・カワラヒワ(21羽)などの個体数も多く、ヤマガラがエゴノキの実をついばんでいる所もよく観察でき、トータル 26種とまざまざだった。



↑	エゴノキの実を啜えた	ヤマガラ	↑
↓	巣材を啜えたキジバト		↓
			エナガ



3. 樹木伐採進行中

(3-15~3-22) →

上津道沿いの(3-15~3-22)の樹木伐採が行われた。外来種であるメタセコイアなども残され、残された本数が多いが、これまで見えなかった中津道沿いの「もみの池」「自然観察学習館」が見える。

万博公園にキジがいなくなった理由は「木々が育って草原が無くなったため」とわかったが、その後も上津道・中津道間の樹林の生長で、観察できる小鳥が少なくなっていた。今回の「保全・利用林」の広い範囲での樹木伐採により、小鳥類が増えることを期待したい。

これまで何回か説明しているように、万博公園の樹木管理は

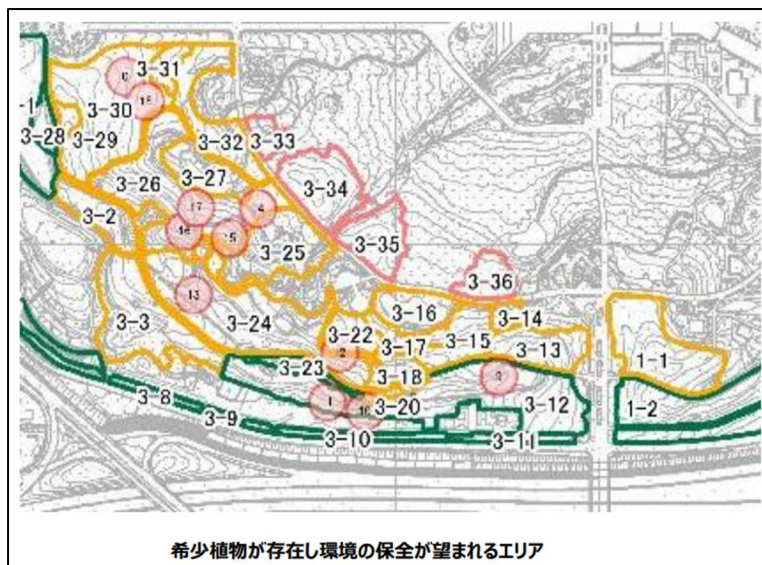
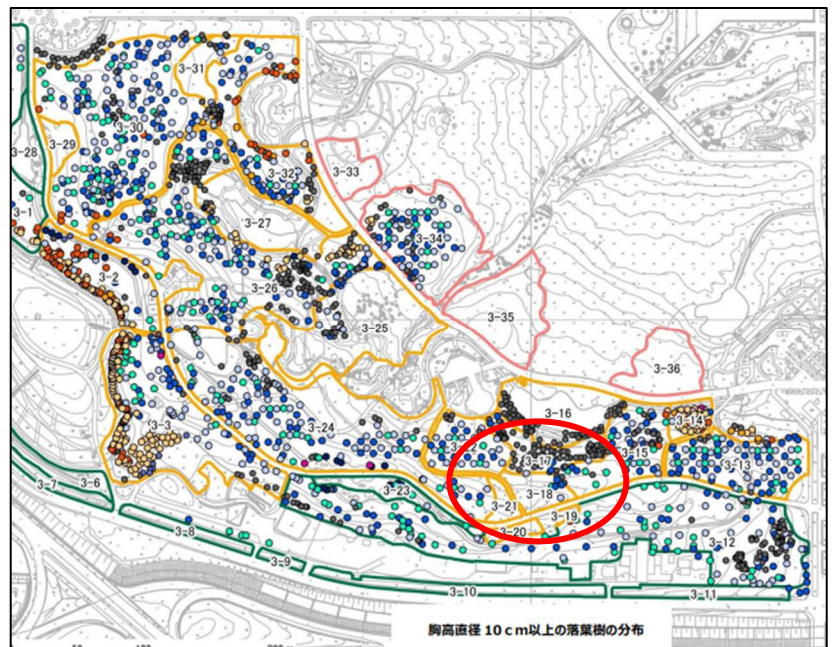
第1期 植えた木が育てる管理

第2期 自立した森づくり

(15X15mの人工ギャップ方式)

第3期 樹林タイプを決め健全な森づくりと変遷してきた。

今回の伐採範囲(3-15~3-22)は、黄色枠で囲まれた**保全・利用林**とされている区域である。



← 3-2 希少植物の保全

2022/7、万博公園にある希少植物を守ってほしいと、緑整備部会(学者)、公園事務所職員・工事計画業者に対しお声をかけし、希少植物生育地見学会を開催した。

2022/10 開催の緑整備部会において、確認した希少植物(野草)の生育地が、「**希少植物が存在し環境保全が望まれるエリア**」として、右図に●で記載された。更に 2022/12、2023/2 開催の緑整備部会では、希少植物生育地を現状のまま守るとされていた。

今回伐採地(3-22)にタシロラン群生地があるが、どのように保全されるのか、確認していきたい。

